

- ※ 以下のレジュメは、2016年8月26日にルネサンス研究所関西研究会に提出したものである。討議を踏まえて一部修正している。
- ※ <1. 「3・11後の叛乱 反原連・しばき隊・SEALDS」(笠井潔、野間易通 集英社新書) より>の部分で、インデントして①②・・・を付している部分は、報告者のコメント。それ以外は同書の野間氏担当章を報告者が要約ない引用している。小見出しは報告者がつけた。
- ※ コメントは同書の言説に対して行われている。同書が、どこまで運動の実態に即して表現されているかは、分からぬ。

ルネ研関西研究会

2016年8月28日

311以降の民衆運動の評価－反原発と反安保法制をめぐる自然発生性について

後藤 元

1. 「3・11後の叛乱 反原連・しばき隊・SEALDS」(笠井潔、野間易通 集英社新書) より

1) 背景：

a) リビングトゥギャザー計画：

新宿2丁目コミュニティーセンターakitaを拠点

HIV感染者の手記を集めクラブなどライブで朗読するイベント、ブックレットの発行

b) TwitNoNukes：

首都圏反原発連合の構成団体、リビングトゥギャザー計画の人脈と交流

c) 両者は、2014年～2015年に

プーチン大統領のLGBT政策（同性愛宣伝禁止法）への路上での抗議行動

渋谷区の同性パートナーシップ条例に反対する右翼に対するカウンター行動

東京レインボープライド（2014）、東京大行進2015、の人的ルーツとなっている

d) レイシストをしばき隊 2013年2月～9月

その後、CRAC(Counter-Racist Action collective)

「ときどきカウンタープロテストを呼びかける反レイシズム運動の市民団体」であり、

クラブ・イベント・オーガナイザー、Tシャツ屋、CDショップ、書店でもある。

e) しばき隊：「もっともクラウド的」

レイシストをしばき隊、CRACがメンバーシップ制であるのに対し、「しばき隊」は「反レイシズム運動」「カウンター」に参加する人の総称

f) あざらし：

2015年夏のSEALDsを勝手にネットや現場で盛り上げ、勝手にサポートしようとする人々の自称。中年。参議院平和安全法制特別委員会の横浜公聴会後、国会に戻る車列をシットインで妨害した集団。

「デモやプロテストに集まり終われば雲散する「誰でもない」クラスタ、時に組織的に連携し風船を膨らませたり水を配ったり車を運転したりサウンドシステムを構築したりする人々は、ある種のリベラリズム的な思想をゆるく共有していて、それは実体のある集団として存在しているもの」「2011年3月以来、東京には「大きな政治的イシューが持ち上がるときとさっとデモに集まるコ

ア・クラスタ」が数百人レベルで存在していて、普段はまったくばらばらにそれぞれの生活を送っている。年齢は30代～40代が中心、リベラル左派的な考え方を持つがさほど反資本主義的ではなく、アナキスト的でもない。また、ロハスやオーガニック製品を好む層とも違う。共産党候補に投票する人が多いが、党員というわけではなく共産党支持者でもない。2011年の素人の乱の「原発やめろデモ」に集まった無党派層とはもちろん重なるが、同じではない。「その多くは3・11以前から存在した、音楽やアートやサッカーといったサブカルチャーを共通の文化背景とするいくつかの小さな集団がゆるく結びついたもの」

2) イラク反戦以降の「左派」の分岐

a) イラク反戦、サウンドデモの実施：デザイナー、音楽評論家、アートライター、音響技術者
その中で、ASC(Against Street Control)というチームを形成「活動者と音楽関係者だけでなく、編集者、小説家、美術家、ライター、デザイナー、フリーター、プータロー、学生が含まれ、それこれがデモの組織化にあたってノードとなるごった煮の様相」

→2000年代を通じて反戦デモや反グローバリズム・デモに登場する一連の黒ずくめの集団が形成される

b) イラク反戦=ASCの流れが3つの流れに分岐：

- ① ヘイトスピーチに反対する会（フリーター全般労組とノンセクト・ラディカル）：新左翼系
- ② ドブネズミーだめ連—素人の乱—高円寺：アナキスト系
- ③ しばき隊、あざらし：保守系リベラル

あざらし：もともとは素人の乱の祝祭的な反原発デモに批判的な動機で独自に反原発デモを始めたTwitNoNukesがルーツ。あざらしはドブネズミの系譜にはない。

二木信（素人の乱）：「官邸前デモでは規範や規律が重視されていて、はみ出し者が自由に参加する余地があまりない」

野間易通：「大衆というのは、はみ出し者の集合ではない。そのはみ出し者が忌避するような、規律を好む穏健で目立たない普通の人たちの集まりである。」「デモや抗議行動が奇異な格好で反社会的行動を好んでとるようははみ出し者の集まりになるとそれは同好の士の集いにすぎなくなり、ひいてはデモそれ自体が目的化してしまう。官邸前に集まっている人々の間に「反社会的で暴力的なアンチヒーローを望む声」などなく、ただ政策を変更してほしいと訴えているだけなのだ」

素人の乱的なデモは「そこで求められているのは「個人の自由は多様性」であり、サウンドデモによる「祝祭」である。つまり、社会の周縁に追いやられているはみ出し者たちが、個としての自分たちの存在を承認されるためのハレの場なのだ。これは貧乏人であるとか不良であるとか前科者であるとかはみ出し者であるとか、決して社会的に承認された何者かではないというみずから属性を、デモの場だけでは捨て去りたいという欲望のように思える」

- ① はみ出し者に対する蔑視。自分たちは違う。社会の中心にいて、規律を好み、その存在は既に承認されている。デモは自己承認の場ではなく、単なる政策変更の手段にすぎない。

3) ナショナリズムをめぐって

- a) 311 以降左派やリベラルが市民を、国民を取り戻そうとしている。「それは大雑把に言えばナショナリズムということになろうが、ナショナリズムもまた「普通」の、そのへんの名もなき人々が拭いがたく内面化しているものであり、左派においても右派においても大衆を動かす原動力となり、ときに全体主義を招く要因となる。
- b) 左派リベラルや反戦平和主義者が「お花畠」と揶揄されてきたのは、ユートピアを夢想するお気輕な人とみなされていたからであり、世界市民だの地球市民だのと気取っているが現実の国家（すなわち日本）に起きる問題には無関心で、主体的に関わろうとしない無責任な人々だと思われたからである。傍観者であるとみなされた。
- c) 実際、「国民」という言葉に拒否反応を示す人々は単に多様性を重視するコスマポリタンであつただけではなく、同時に国民国家の枠組みの中で「国民」としてどう主体的にふるまうかという視点を欠く傾向が強いと思う。護憲を主張しながら、憲法に主権者として明記されている主体である「国民」であることを放棄して、実際には存在しない世界市民、地球市民のポジションに自らを置くことでその責任から逃れてきたのではないか。
- d) こうした人々が、国家は悪だ、民族などフィクションだ、ナショナリズムなど無意味だと無邪気に主張するとき、まず民族や国籍の違いゆえに国家の庇護から排除されてきたマイノリティは「自分はマジョリティの特権を十分保障されていながらずいぶん気楽なものだ」という反応をする。そしてこれは、マイノリティだけでなく多くのマジョリティにとっても無責任な振る舞いとして認識されるのだった。要は、大衆は一種のカスタマー・メンタリティをそこに読み取っていた。批判するばかりで自分は何もしようとしないのではないか、というわけである。反原発運動や反安保法制運動において「代替案を出せ」という非難が少なからず巻き起こったことも、こうした認識と無関係ではないだろう。
- ① 指摘はある意味的を射ている。少なくとも共産主義者は、理念としては、あるいはその欲望としては護憲派ではありえない。国民国家の枠組みを是とすることはありえない。自らを国民として規定し、国益を基準に行動すること、「国民」としてどう主体的にふるまうかを基準とすることをきっぱりと拒否しなければならない。
- ② 問題は、21世紀の物質的基盤の上でその理念ないし欲望をどう運動化し、制度化するかである。インターネットと交通手段の発展を基盤として資本のグローバル化が進み、生産拠点の海外移転と国境を越えた人の移動がかつてなく発展したグローバリゼーションの時代にあって、具体的代替案としての国民国家に代わる枠組みを構想することが求められているし、それを一国レベルで落としこんで政策化することが求められている。
- ③ 日本の左翼は、共産主義者は、「帝国主義打倒」を叫ぶのみでこの政治的構想力を持ちえていないがゆえに、野間などに揶揄されるはめになる。
- ④ 「民族や国籍の違いゆえに国家の庇護から排除されてきたマイノリティ」の問題は、当面は個々の国民国家による居住する権利・労働する権利の認定一取り消しという枠組みでしか処理されえず、その中で同権の要求を掲げ続けることになるだろうが、究極のところは、世界政府の樹立とその下でのグローバルな市民権の確立によって、「国家の庇

護から排除されたマイノリティ」という問題構制そのものを無くすことによってしか解消しない。国民国家の枠組みの外の視点を持たない野間には、お気軽にユートピアにしか聞こえないだろうが。

- e) 一方で311以降の反原発運動には、早い段階で「ふるさと守れ」「日本を守れ」というスローガンが登場し、日の丸を手に参加する人が現れた。日章旗を持ってくる人は必ずしも右翼ではなく、無党派のリベラル市民であったり、保守層の反原発派だった。
- f) 首都圏反原発連合は、日章旗が持ち込まれることを特に排除することはしなかった。国内の土地が直接的に原発事故によって汚染されたことによって、反原発運動がナショナリズムの性格を帯びることは不可避だという認識があったのだ。いつまでも日の丸をお上の象徴として忌避し続けるだけでは、自分たちの手で民主主義を実現することは難しいのではないかと思う。そして社会運動は日本の大衆の心情と乖離する一方となるだろう。
- g) レイシストをしばき隊に始まった2013年以降の反ヘイト・カウンター運動もまた、それ以前の反排外主義運動とは異なり、あからさまにナショナリズムを動員していた。プラカードには「ネトウヨは日本の癌」「レイシストは日本の恥」といった文言が並んだ。「一丁前に日本人ヅラしてんじやねえ」「レイシストは日本から出でいけ」
- h) 2010年までの在特会へのカウンター行動は、「レイシストには日の丸が良く似合う」などと、レイシストと「愛国者」「保守派」あるいは稳健派リベラル・保守リベラルを同一視して「同じ差別者だ」と悪罵を投げつけてきた。「いま社会の中にある差別や不平等なんかを解消することより、自分の潔癖性アピールと他者を徹底的に糾弾する快感を優先する人たちのせいで、社会運動が崩壊してきたことか。多くの「良識ある市民」が遠ざかってしまったことか。」
 - ① シングル・イシューによる共同行動の必要を前面に掲げるのであれば、組合の旗等に反対するのと同じく日の丸にも反対しないと、本音は別のところにあると思わざるをえない。
 - ② 在特会へのカウンター行動において「愛国者」「保守派」に対しても「同じ差別者だ」と悪罵を投げかけることは、戦術的に狭く、有効ではない。それにより「多くの良識ある市民」が遠ざかってしまったことがあるかもしれない。
 - ③ 同様に、市民団体や組合の旗を拒絶しつつ、日の丸だけは許容することによって「多くの良識ある市民」が遠ざかってしまったことがあるかもしれない。
- i) 現在の反レイシズム運動では、被害者であるマイノリティに寄り添いそれを支援するのではなく、社会の病理としてのレイシズムやヘイトスピーチを直接相手にするという基本コンセプトが共有されている。「在日を守るためにやっているのではない。社会を守るためにある」
- j) シティズンシップを持つ自分たちがそれを持たない在日やニューカマーを代弁して彼らのためにやっているというものではなく、直接的に自分たちのために、自分たちが主体となってこの事態に責任を負う。ナショナルプライド。
- k) この「国民」は何なのか。国民=市民=国籍を有すもの=国民としての権利を有すものではなく、国家を構成するものとしての主権者としての国民。

「「国民とは国民たろうとする人民だ」「国民とは国の方を創り出していく人民だ」」そうだとすれば運動に参加した人々こそ「国民」ではないか。政府と国家機構の外で自ら日本の政治を方向づける「被治者」は、自分が権利の上で国家より先にあるものとしての「国民」であることを知りかつ示した。」/日高はこの国民概念を、戦後直後の私生活主義から脱却し、政治的情熱を持ち始めた人々をあらわす言葉として使っています。昨今の国民概念批判が国籍概念とほぼイコールに使うのとは全く違います。/ですから、今の運動における国民という言葉は、能動的主体的政治参加が大衆的な広がりをもったことの「指標」として「再発見された」とも言えるわけです。こうした概念の揺らぎそのものが、今の日本政治の揺らぎの指標であると捉えることが大事だと思います。(木下ちがや)

l)だから外国籍の人も「国民」なのだ。現にシールズには留学生もいる。

m) SEALDs の「国民なめんな」は、政府に向けて国民が「言うことを聞け」と訴えかけるスローガンであり、国家に明確に対峙する主体としての国民というものが、数十年ぶりに明白な形となって立ち現れることを示しているのではないか。これは「言うこと聞かせる番だ俺たちが」というスローガンと対になっている。

n) 日本という国の主権者はあくまで「国民」であり、政府が勝手なことをするのは許されない。特に運動の主題が「憲法を守れ」というものである以上、これは現在自分が主権者として所属している国民国家の枠組みを直接問い合わせるものであり、だとすれば国家に真正面から対峙する政治主体としての国民を名乗るほかないである。まして政府や右派が国民の代弁者を装って排外主義を煽り戦争への道を開こうとしている時には、はっきりと「国民」の名においてそれを拒否しなければならない。つまり、政府や国家から「国民」を取り戻す必要がある。

- ① 自分たちが自分たちの社会を守るために、自分たちが主体になってこの事態に責任を負う。強者の発想。
- ② 他者との連帶の思想がない。横への広がりは、連帶ではなく、自己コピー的増殖。人々、政治的シングル・イシューに個人として反応するという運動スタイルなので、政治過程とは相対的に自立的な、連帶の前提となる自立=自律の恒常的運動構造を必要としない。
- ③ 311 以降の反原発や反安保法制といった闘争には、こうした組織に所属しない個人としての参加者と恒常的に活動している運動団体や労組・市民団体のメンバーおよびその周辺としての参加者がいる。闘争が高揚したのは前者が多かったからである。そして、この前者をどのように評価し、どのような態度を取るべきかが、共産主義者に問われている。
- ④ 「左翼」に対しては対案がないことを批判するが、国家の政策に反対し拒否するだけ。自分たちが何を生み出そうとするのかはない。
- ⑤ 「国民」が変革の主体を指示する言葉として流通している。かつて共産主義にはプロレタリアートという変革の主体を支持する言葉があり、それが社会的に流通していたが、今や見る影もない。ここにも共産主義の理論と実践の影響力の後退を見てとれる。
- ⑥ 他方、ナショナリズムを肯定的に押し出そうとするリベラル派が近年目立つ。グローバリズムと対抗するための国民国家=国民経済の再興。自由貿易批判。ナショナリズムを

飼いならすためのナショナリズム、云々。萱野稔人、中野剛志など。

4) 結社と大衆運動

- a) レイシストをしばき隊は結社ではあったが、実際に「蜂起」に馳せ参じた人々の多くは、結社のメンバーではなかった。集まる人々は結社には加わっていないが、しかしある一定の価値観や政治的信条を共有している。明確なリーダーはおらず、会合も行われないが、アイデアは日々交換され、全体としてその価値観や政治的信条をエンパワメントする方向に働く。これはツイッターをはじめとした SNS 上でオープンに行われているもので、「指令」もその中から発せされる。「指令」はシングルイッシュで、どのような内容かによって、それを発する人はその都度替わる。ビラやプラカードといった印刷物はネット上で配布され、各地のセブン・イレブンから出力される。
- b) こうしたことが組み合わさった結果、現場にはビジュアル的にある程度の統一感を持った、明確な意志を体現する大衆がその日その時間だけ現れることになる。そして行動が終われば、雲が消え去るよう、その場から消えていくのである。「保育園落ちた日本死ね」というはてな匿名ダイアリーに端を発した行動が、全く同じ仕組みで行われた。
- c) つまり、現在の社会運動においては、政党や組合や結社といった強固なつながりを持つ組織ではなく、社会問題の各イシューを通じて形成される集合的アイデンティティのようなものが動員の直接的要因となっており、「311 以降の叛乱」の多くはその形式で行われているのである。
- d) 90 年代末の徳島県における吉野川可動堰反対運動でも住民投票を呼び掛ける自発的な「プラカード」が登場し、プラカードを手に徳島市内各所、それぞれの思い思いの場所に立った。多くの人は、運動の母体となる「住民投票の会」には所属していなかった。この運動には作家やデザイナー、出版関係者、建築家らからなるフォーラム 21 というグループも「政治ではなく文化的課題」として参画し、「シンプルかつ美しく運動の主張を伝達」することに貢献した。彼らの運動は「体制一反体制」という対立軸では吉野川の問題を恰好悪くしか語れないから、格好いい一恰好悪い者として把握すべき」だという発想で進められ、「服装も、勝ち組がやっているというイメージを持ってもらうことが必要で、スーツを基本にした」という。
- e) 東日本大震災と原発事故を経て、多くの人々が自分の生活の問題として国政の矛盾に直面せざるを得なくなった。東京で反原発運動に集まる多くの無党派市民は家族や子どもを遠方に避難させている人も多く、また給食の放射能汚染を心配する母親・父親もたくさんいた。だから、金曜官邸前の反原発抗議に足を運んで国政への異議を唱えることは、同時に自らの日常生活を守るために住民運動/生活運動の側面も持っていたのだ。こうした性質を持つ社会運動においては、問題意識を共有すること自体が集合的アイデンティティを形成するのであり、それが既存の組織が果たしてきた役割一連帯、オーガナイズ、動員を担ってきたのだと言える。
- f) 「保育園落ちたの私だ」を唱えて国会前に集まった人々は、この集合的アイデンティティを具現化するメソッドを SNS 等を通じて既に十分に知っていた人たちであった。だからこそ、あのように迅速に行動に移すことが出来たのだ。
- g) 住民運動的なシングル・イシューが集合的アイデンティティを形成し、それが「組織」に代わって運動をドライブするということに加えて「311 以降の叛乱」では既存の集合的アイデンティティもまた、大きな役割を果たした。それはパーティーである。いわゆるクラブイベントを指す。

DJ がいてダンスフロアがあつてミラーボールが回っているような空間で行われるイベントのことを音楽業界では一般的に「パーティ」と言うのである。お酒を飲んで友達と楽しみ、知らない人と交流する場もある。これも集合的アイデンティティの一つ。

- ① SNS を前提とした運動スタイル
- ② 生活保守としての東京における反原発運動
- ③ パーティーに参加することが日常となっている集合的アイデンティティ。SEALDs も集会後の打ち上げはクラブで。
- ④ SEALDs : プラカード、映像、スローガン、コールへのこだわりと技術。「私たちの運動がスタイルに見えるのは、渋谷や新宿でデートしているようなおしゃれな若者を含め、社会の『内側』にいる人々が声を上げているからでしょう。政治に無関心な人たちの目に最初にとまるのは、主張の内容ではなく運動のスタイルだと思います。デモは、民主主義を再起動させるためのプレゼンテーションです。旧来的な左翼の運動と映るのか、同時代のクールな人たちの運動と映るのか。この違いは決定的に大きいと考えています」（東京デモクラシー・クルー高橋若木）

5) 叛乱か生活保守か

- a) 小泉改革ー新自由主義以降の日本の政治的主流は、基本的には革命をめざす勢力であり、むしろリベラルや左派が守旧派の立場をとってきた。自分が戦っている相手は革命勢力であり、こちらは反革命なのだという意識があった。
- b) 旧来の革命勢力からは 311 以後の運動が権力と対峙していない、あるいは根本的な変革を放棄しているという批判を受けてきた。「生活保守だ」と罵倒された。
- c) 生活保守とは「現状の生活を維持するために改革を忌避する」と言うのが元々の意味で、社会的な関心よりもプライベートな生活の安寧を重視する態度のことを言う。これは 80 年代のバブル前後に生まれた言葉で、311 以降の運動に向けて「生活保守だ」とののしる左派リベラルもおそらく 40~50 代が多いのではないか。そこで批判されているのは資本主義と消費社会の肯定である。
- d) 311 以降の運動は、日常生活を守るための住民運動/生活運動の側面も持っていた。それが「叛乱」足りうるのは、大きな力が生活を破壊しようとしているときである。つまり、「保守」であり同時に「叛乱」であるために、必然的に左右両方の革命勢力を相手にしなければならなくなる。現状では右派与党政権がそのメインターゲットであり、左翼は後ろから撃ってくる者、あるいはいらんことばかりする無能な味方である。
- e) SEALDs が国会前で小林節と並んで「立憲主義を守れ」「憲法を守れ」と叫ぶそのとき、彼らと議会制民主主義それ自体に異を唱える新左翼党派との共通点は、「反安倍政権」の一点でしかない。しかし前者は反革命的思考に基づいており、後者は革命思想に基づいているのだ。
 - ① 基本的イデオロギーとしての、日常生活を守る。これまで通りを望む反革命。資本主義の外の視点、国民国家の外の視点を必要としない。

6) なぜオルグがないか

- a) そもそもオルグのための「教義」、すなわち左翼セクトで言う理論書といったものがない。「311

後の叛乱」が始まってからすでに5年が経過しているが、これを「指導」する統一的な理論書というものは書かれていないし、これからも書かれないのでないか。

b) しかし、理論書はなくとも理論は存在している。それは、広大なネット空間上の不特定多数の人々の言葉による不定形なものとしてそこにあるのであって、もしこれが一つの理論書にまとまるとなれば、誰かの創造物ではなくもともとそこに存在しているものに形を与えるような作業になるのではないか。デモやカウンタープロテストのオーガナイズですら、そこにある大衆の意志にかたちを与える作業でしかないのである。

7) 器を作るための実務集団

a) 反原連とは完全な実務集団であり、「デモ屋」である。「首都圏反原発連合として重要な問題とは、原発をめぐる政府や電力会社の動き、議員の動き、効果的な抗議の方法、何を対象にいつ抗議すべきか、警察の状況はどうか、トラメガの配置や配線をどうするか、バッテリーは足りているか、その他の資材は揃っているか、誘導スタッフは誰がやるか、プレス・リリースはできたか、次の街頭デモのコースはどうするか」といった、抗議やデモを効果的に行うために最適な状況を作ることであり、常に注力しているのはそこなのだ。日の丸がどうのこうのと会議で話す余裕も必要性も全く感じていない、完全なる実務集団である。国旗国歌問題も路上の自由も新しい公共圏云々も、会議ではすべて「どうでもいい」話題だった。

b) 反原連それ自体は「思想」を持っていない。なぜなら、その「思想」は、反原連が呼びかけた抗議行動に集まる不特定多数の個人大衆のなかにあり、反原連もまた、こうした「思想」をゆるやかに共有している個人の集合体でしかないからだ。彼らは自分たちの職人的技術を使って、金曜夜の官邸前に器を作り提供しているにすぎないからである。

c) CRACはその自己紹介の中で、「反レイシズム・アクションをさまざまレベルで実行するためのプラットフォーム」とあると説明している。が、こうした枠組みを人為的に設定しても、実際には運動がその枠組みに収まることはない。CRACや「しぶき隊」から派生したものとしてはTOKYO NO HATE(東京大行進)やTokyo Democracy Crew、東京給水クルーといったグループが、そもそもCRACとは別に活動してきたものとしては男組や差別反対東京アクションなどがあり、さらにその他にも無数の小さな集団があって日々分裂・再編成を繰り返しているのだが、お互いの間に構想や反目が生じることは少ない。これは、かつての新左翼セクトのようにテーゼの違いによって分裂しているのではなく、単に実務上の都合によってそのときどのときで最適のフォーメーションを組むように動いているからだ。

d) こうした運動形態においては、分裂は内ゲバの結果にも要因にもなりえない。なぜなら分裂することによってパイの取り合いが起きるどころかそれが新たな参加者を獲得するため、運動は総体として弱体化するのではなく強化していくのである。理論はあらかじめ個人大衆の中に存在していて、各集団はそのニーズを感知することによって立ち上がり、それに具体的な形を与えて行く。要するにオーバープロデュースを受け付けない自律的なダイナミズムがそこにあるということなのだ。

e) 「311以降の叛乱」においては、「支配され搾取された大衆のその利害について」の「何らかの表象」は、大衆を指導しようとする前衛組織によって「創り出」されるのではなく、あらかじめ存

在しているものを察知した無名の個人たちによって「彫り出される」のである。結果、大衆は「自己二重化」（即自かつ対自）することはない。そのかわり「団結」もあまりしない。しかし「闘争」は行われるのである。

- ① これまで通りを望む生活保守主義であるからには、資本主義の外に出、国民国家の外に出ることを欲する新しい人間の形成は不要であろう。だから自己二重化することも不要なのだ。あるがままの自分を中心に自己回転する運動と主体。それを肯定するのが彼らの思想であって、思想がないのではない。
 - ② しかしながら闘争の場には他者との出会いがあったはずである。同じ SEALDs、同じ 反原連の中にも他者との出会いはあったはずだ。「国旗国歌問題も路上の自由も新しい公共圏云々も、会議ではすべて「どうでもいい」話題だった。」とすれば、それは、それらの問題を重要だと思っている人を予め排除した結果にすぎない。
 - ③ シングル・イシューで器を作り、大衆のエネルギーを最大限解放する技術と能力は学ぶ必要がある。全ての旗を排除し、サウンドデモを活用して運動に初めて参加する個人が参加しやすい雰囲気を作ることも時に重要だろう。だが、我々は、多数の異なる主張、多数の他者こそが結集し、共同することで、自らを対自化し二重化すること、新たな主体が生まれることこそを肯定しなければならない。それを押しとどめることこそが反革命の名にふさわしい。
- f) 何のために闘うのか。権力のためか。自由のためか。民主主義のためか。結局行きつくところは、シンプルに個人の尊厳と誇りのためだと言うことができるのではないか。
- ① 結局行きつくところは、自己満足のためということか。

g) 教義も教会も修道院も持たない新たなレフトの誕生ととらえたい。

- ① 教義も教会も修道院も持たないというのは、教条主義的「真理」（教義）の独占者としての前衛党（教会）を指している。こうした「新たなレフト」は、私のめざすところでもあるが、野間が「レフト」に見えるのは、日本社会全体が右にシフトしているからに過ぎない。あるがままの自己を肯定するのであれば、せいぜいリベラル保守と自己規定すべきではないか。

2. コメント

- 1) SEALDs 多数派は生活保守派であり、中には日常を変えたいと思っている人もいるが少数派であることは、『現代思想』2015年臨時増刊号総特集「安保法制を問う」での SEALDs 関西の大澤茉実の文書が示している。<①シールズ内多数派は「日常の幸せ」を感じている人たちで、それを守りたいと思っている。自分は日常をぶち壊したいと思っている。②SEALDs 内でも特定の立場やイデオロギーが権威化する傾向があるが、そうはなりきっていない。多数派の意見に対し違和感や疎外感を持っている人のスピーチも、権威的マジョリティの心に響き、受け入れられている。他方、権威的マジョリティとして、ではなく、「私」として語る多くの学生のスピーチに自分も心を動かされた。③こうした「個人の集まりである」ことが保守性の中の革新性を担保している。なんとなれば、「停

滯の時代にあっては既存の組織は現状維持を図るために往々にして個人を犠牲にする」が、「私たち」若者は「いまある「パイ」の活用や分配のあり方に敏感になってい」て、「周辺的な立場の者への分配が後まわしになることに拒否感を持」っているからである。この拒否感の「日常レベルの知恵や実践」としての現れが、個人の集まりとしての組織のあり方として具体化している。「かつてなら大きな権威によって無下にされたであろう「わたし」たちも、政治的発言権を手に入れ始めた。それが、個人も社会も豊かにするのだと、肌感覚で知っているのである。」>

- 2) SEALDs を構成する多数派は守るべき「日常の幸せ」を保持している人たちである。おそらく反原連やしばき隊の多数派もそうである。この層は、95年の阪神大震災以降社会的に認知されてきたボランティア層、ロハス系、NPO・NGO を構成する層と一主張の表れ方はそれぞれ異なるが一重なる。比較的上層であり、活動的な部分は比較的時間の自由がある個人事業主ではないか。傾向として生活保守派であり、その基盤の上で社会的諸問題の解決に自己の時間とエネルギーをつかうことを喜びとしている。
- 3) こうした生活保守の論理と運動は、同世代の貧困層には届かないのではないか。90年代以降の長期不況と新自由主義政策による格差の拡大と不安定雇用・非正規労働者の増加の中で、社会的承認を享受しづらい大量の人々が生み出され続けており、とりわけ若年・青年下層労働者層と重なる。こうした貧困層の欲望は日常の破壊であり、変革である。そしてこの層を引き付けてきたのが小泉以降の右からの改革派である。
- 4) 「希望は戦争「丸山眞男」をひっぱたきたい」で注目を浴びた赤木智弘は、「左翼」を批判して大要次のように述べていたように思う。「自分たちは職場で人間扱いされない。仲間とも思われていない。単なる使い捨ての労働力である。長時間の残業を経て家に帰っても、親からは穀つぶしだと思われている。結婚しようにも収入がないので結婚できない。そんな自分たちを左翼は男だ、日本人だと言って批判する。ところが右翼は、自分が日本人であるだけで、男であるだけで肯定してくれる。云々。」

赤木の主張は、70年代以降の日本の新左翼の抱えている深刻な問題を指摘しているように思える。日本の新左翼は学生インテリが主導した運動であり、一部の寄せ場闘争などを除き、むしろ上で見えてきた生活保守派を支持基盤にしてきた。80年代までの一億総中流という社会経済状況の中ではそれで通用していた。だが、90年代以降の格差の拡大により新たに出現した下層の若年・青年労働者が潜在的政治勢力となる中で、左翼は彼らと結合する術を持っていない。彼らに届く言葉や思想、彼らとともに活動する実践を持っていない。

- 5) これら二つの層の運動は、それぞれ異なる論理と構造を持たざるをえない。その意味では、その双方を内部に抱える SEALDs は、内部論争が発生するのが健全なようであるし、矛盾は発展させ、その結果別の団体に生まれ変わる（つまりは他者との出会いの中で自己を対自化し、新しい人間として自己生成する）か、さもなければ分裂すべきなのだ。分裂した上で共闘したら良い。左翼の目的意識性は、運動に内在化し、運動に 7 に内在するこうした矛盾を促進し、発展させることにあるように思う。

その意味において、私は共産主義者の取るべき態度として、二つの層のどちらか一方を称揚し、他方を攻撃すべきだとは思わない。われわれは、上記の二つの層の運動のそれぞれに異なる傾向、論理、構造を理解し、それぞれに届く言葉を持たなければならない。そして異なる二つの運動をつ

なげていくことを目指さなければならない。二つの異なる運動がつながることで、新たな運動の質、新たな政治が生まれることを目指す必要がある。大澤の SEALDs 分析はその可能性を示しているのかもしれない。

6) CRAC やしばき隊から派生したグループの一つに東京デモクラシー・クルーがある。そのメンバー高橋若木へのインタビュー記事「デモと民主主義」が 2014 年 9 月 13 日朝日新聞に掲載されている。資料として添付しているが、大要以下のようない主張である。「(大規模デモを主催するのは) 自分たちが暮らしてきた日本社会が好きだからです。」「戦後日本の民主主義を保守したい」「私たちは、自らを社会の「内側」を作っている市民であり、主権者という強者だと思っています。狭量で短見で、主権者を見下すような無礼な政治家は、叱らないといけない。そういう強者の感覚に根ざしたデモを自分たちで作ろうと思う」「私たちの運動がスタイリッシュに見えるのは、渋谷や新宿でデートしているようなおしゃれな若者を含め、社会の「内側」にいる人が声を上げているからでしょう。」「投票とデモは民主主義の両輪、デモが日常の光景になれば、そのような投票層の拡大につながります。選挙以外に、政治に主権者の意思をインプットする回路が必要です。デモはそのひとつ。民主主義の基本装備です。」云々。ほぼ野間の主張と同じラインである。

こうした発言を捉え、「「デモと投票は」は民主主義の両輪だという理解は、政治は主権者がつくるという立憲主義のもう一つの柱だ。」「今、成長しつつある立憲主義は国家や政治を創る主体として主権者=市民は存在するという民主主義的理解であり、立憲主義の十分条件を構成する。「社会の内側」を構成している市民との理解は日本の民主主義の成熟を表現する出来事であると思う。戦後 70 年、この国の転換期において、新たな地平を切り開きつつある。」と最大限称揚する言説が、新左翼とみなされる人から発信されている。

7) こうした立場が持つ問題点は、次の二つである。

一つは、国民国家主権を対象化しうる外の視点を持たないこと。

もう一つは、デモに参加する一人ひとりの中に重層的・複合的に存在している「政治」と「社会」「経済」を切り離し、狭い「政治」だけを取り上げて称揚していることである。彼らに見えているのは「主権者=市民」であり、下層労働者や、デザイナーや編集者、アーチストや、大学教授や、エリートサラリーマン、経営者ではない。「主権者=一人ひとりの市民」同士が抱えている矛盾や敵対関係は覆い隠されている。資本主義を対象化しうる外の視点を持たないこと、と言ってもよい。

安保法制は批判しても、安倍が推し進めている原発輸出・武器輸出は焦点化されない。これらの輸出を推進している三菱・日立・東芝など原発メーカー、武器メーカーへの批判は行われない。運動参加者の利害対立が顕在化し、運動が弱まるからか? 景気が悪くなると困るからか? 「主権者=市民」で論理が自己回転する限り、「主権者」内部の矛盾と連帶、「主権者」外部との矛盾と連帶という課題は置き去りにされる。

8) 大衆運動の自然発生的高揚は、これを大いに促進すべきである。と同時に、運動内部の矛盾を発展させること、なつかつ連帶をめざすこと、外部との矛盾を開かれていること、なつかつ連帶をめざすこと。それを教条主義的な真理から演繹して外部から注入するのではなく、現実にある矛盾に内在化し、そこから出発し、運動参加者と共に創り上げていくこと。これが共産主義者の果たすべき

役割であり、求められている能力ではないか。

- 9) ラクラウ主義の評価、
- 10) 外部注入論と前衛主義の評価
- 11) 運動の水平性と代表制の問題、
- 12) 運動と制度（構成的権力と構成された権力）の問題、
- 13) 新たな形質の、ポストフォーディズ無敵大衆運動に対し共産主義者（のグループ）がどのような態度をとり、どのような役割を果たすべき/果たし得るのか

参考文献

- 『3.11後の叛乱 反原連・しばき隊・SEALDs』 笠井潔、野間易通 集英社新書
『現在思想』 総特集安保法案を問う 2015年10月臨時増刊号 青土社
『高橋源一郎×SEALDs 民主主義ってなんだ？』 河出書房新社
「デモと民主主義」 東京デモクラシークルー高橋若木インタビュー 朝日新聞 2014年9月13日
<http://digital.asahi.com/articles/DA3S11348304.html>
『資本の専制、奴隸の反逆』 廣瀬純 航思社

デモと民主主義 政権批判デモの主宰メンバー・高橋若木さん

2014年9月13日朝日新聞

<http://digital.asahi.com/articles/DA3S11348304.html>

原発再稼働。集団的自衛権の行使容認。安倍政権が進めるこうした政策に、「1強多弱」の国会はブレーキ役どころか十分な議論の場さえつくれずにいる。そんな政治状況下で、特定の党派や組織によらない人たちが新しいスタイルのデモを始めた。仕掛け人の一人、高橋若木さんに、デモが持つ意味と、この国の民主主義について聞いた。

——さかのぼること2カ月前、集団的自衛権の閣議決定に抗議する首相官邸前デモを仕掛けたのは、みなさんですね。「東京デモクラシークルー」。どんな人の集まりですか？

「3・11後の脱原発デモや、ヘイトスピーチに対抗するカウンター活動、特定秘密保護法反対デモなどの現場で知り合った人々によるゆるやかなつながりです。20～40代の普通のサラリーマンのほか、デザイナーや編集者、アーティスト……。個人的に仲がいいというより、ネットで連絡しあってデモをつくりあげる『協力者』という感じです」

——特定の組織や党派によらずに大規模デモを実行するには、大変な時間と労力がかかるでしょう。お金にもならないのに、なぜわざわざそんな面倒なことをするのですか。

「自分たちが暮らしてきた、日本社会が好きだからです。安倍さんが言う『戦後レジームからの脱却』は、要は革命。私たちは、そんな安倍さんから、戦後日本の民主主義を保守したい」

「3・11以前、日本のデモのほとんどは、社会の『外側』から、社会を糾弾したり、嘆いたりしがちだったと思います。少数の『目覚めた』弱者による、多数派への抵抗。こわばつた悲壮感が漂い、デモから人を遠ざけていたと思います」

「私たちは、自らを社会の『内側』をつくっている市民であり、主権者という強者だと思っています。狭量で短見で、主権者を見下すような無礼な政治家は、叱らないといけない。そういう強者の感覚に根差したデモを自分たちでつくろうと。強者の余裕は悲壮感を退けます。ユーモアがありながらも容赦のない、クールな抗議を目指しています」



——権力者は、選挙で選ばれた我々へのデモやシュプレヒコールこそ無礼だ、と思っているのでは。

「それは代議制民主主義に対する無知ですね。選挙で『代表』を選んだからといって、全権委任しているわけではない。主権は、選挙後も変わらず私たちの方にあります。そのことを忘れているなら、デモという非暴力的な手段で圧力をかけるのは当然でしょう。自民党は先日、国会周辺でのデモの規制を検討しようとしたね。『うるさくて仕事にならない』からだそうですが、その仕事を任せているのは主権者です。ちゃんと仕事をしてくれればわざわざ抗議に行く必要はない。迷惑をかけられているのは私たちの方です」

「私たちは、何か特定の『善』を社会に広めたくてデモをしているわけではありません。何を善と思うかは人それぞれです。だからこそ、特定の善を他者に押しつけたり、押しつけられたりしてはならない。支配しないし、支配されない。そのようなフェアな関係を守るための枠組みを定めているのが憲法です」

「安倍政権は集団的自衛権の行使容認という、本来は憲法改正しなければ出来ないことを、閣議決定だけで決めてしまった。戦後日本が守ってきた、最低限フェアな社会であるための枠組みを壊すもので『支配願望』の表れだと思います。もはや個別政策の当否にとどまらない、政権を担う資格があるかという問題です。だから首相官邸前のデモは『集団的自衛権の行使容認反対』のコールが、いつしか安倍さんの退陣を求める声に収斂（しゅうれん）されていきました」

——しかし、名指しのコールは「デモは怖い」というイメージを増幅させているのではないですか。

「抗議型の社会運動は、『指をさす』ことから始まります。『戦争をやめよう』とやわらかく呼びかけても、『軍国主義の始まりだ』と訴えても、抗議の対象が漠然としているので『世間』には伝わりません。すでにくすぶっている具体的な怒りや違和感があるのですから、それを社会に表出させが必要です。そのためには、民主的な政治プロセスへの侮蔑を隠さない政治家は『敵』として指をさし、『辞めろ』と言う。民主主義は正しい『指さし』によって、求心力を回復します」

「怒りを可視化することで、人々の無関心を揺さぶり、民主主義がつねに起動している社会にしたい。不公正なことをする政治家に対しては、怒っている人が多くいることを知らしめ、社会に対しては、怒った時は堂々と表明していいことを、目に見える形で示していきます」

——デモに効果はあるのでしょうか。訴えが届いたり、現政権がデモによって政策を修正したりすることもない。何かが変わったように見えませんが。

「効果は確実にあります。自民党幹事長が『デモはテロ』と言ったり、政調会長がデモ規制を持ち出したりするのは、それぐらい嫌がっているからでしょう。『1強多弱』で国会が機能不全に陥る中、嫌がられる勢力がいることは大事です。そしてもう一つ、政治に無関心だと言われ続けてきた若い世代の参加者が増えているのも大きな変化です」

■ ■

——現場で取材していると、「ケンポーを一まも一れー」みたいなやや間延びした年長世代のシュプレヒコールが、若者に引きずられてラップ調に変わっていきました。若い世代はなぜ動き出したのでしょうか。

「意外かもしませんが、たぶん保守的だからでしょう。私たちより若い世代は、高度経済成長も、多幸感にあふれたバブル期の日本社会も知りません。経済的な繁栄を再びと思ってないし、日本は没落したから上るるために抜本改革が必要だという年長世代の焦りもピンとこない。大事にしているのは、いまの日本社会にある自由であり平和であり多様性です。それを守りたい。そして何より素直です。かつての学生運動を知らないので、肩ひじを張らず、嫌なものは嫌だと普通の言葉ですんなり言える強みがあります」

——その一方で、若い世代の「右傾化」も指摘されます。

「インターネットが普及し、人はインスタントな情報に刹那（せつな）的に反応するようになりました。良い悪いではなく、社会のインフラの変化です。集団的自衛権では、ふつうの中高生や大学生が、ツイッターで『戦争いやだ』『安倍ふざけんな』とつぶやいていました。『安倍』の漢字がことごとく間違っているんだけど、そういう直感的な怒りを大事なものとして拾っていくことをリベラルの側は怠つ

てきました。そこは右派がうまかった。中韓が悪い、サヨクが悪いと言い続け、怒りや不満の感情をつかみ、拡大しました」

「若い人の多くは、ハードな労働環境の下、政治や社会の問題について思考する気力も、その気力を支える社会に対する希望も奪われつつあります。問題を分析したり、社会を漠然と嘆いたりするだけの、リベラルの『お説教』に付き合っている暇はありません。私たちは広告的な発想も使って、正しい『指さし』で人々の感情をつかまえにいく。十分に巻き返せると思います」

——デモの前にデザイン性の高いプラカードが何種類もネットにアップされ、ツイッターでは「おしゃれしていかなきゃ」というつぶやきがありました。運動のカッコよさを強調されているのも、戦略ですか。

「私たちの運動がスタイリッシュに見えるのは、渋谷や新宿でデートしているようなおしゃれな若者を含め、社会の『内側』にいる人々が声を上げているからでしょう。政治に無関心な人たちの目に最初にとまるのは、主張の内容ではなく運動のスタイルだと思います。デモは、民主主義を再起動させるためのプレゼンテーションです。旧来的な左翼の運動と映るのか、同時代のクールな人たちの運動と映るのか。この違いは決定的に大きいと考えています」

■ ■

——現実にはデモで政権を変えることは極めて難しい。最後はやはり選挙ではないですか。

「デモに参加する人たちは政治的関心が高いので、選挙のときには候補者の情報をチェックし、拡散し、もちろん投票にも行きます。投票とデモは民主主義の両輪。デモが日常の光景になれば、そのような投票層の拡大につながります」

「国政選挙は、さまざまな問題をまとめて有権者に問うものですから、個別の政策についての民意が結果に反映されないことがあります。たとえば世論調査では脱原発派が多数派でも、原発推進の自民党が勝ってしまう。だからこそ、選挙以外に、政治に主権者の意思をインプットする回路が必要です。デモはその一つ。民主主義の基本装備です」

「選挙は大事ですが、20世紀のファシズムを代表するナチス政権は選挙で生まれたことも覚えておきたい。デモの究極の役割は、どんな政権ができても完全には押し込まれない、公正な社会の枠組みがボロボロにされないような政治文化をつくること。『これは自分たちの社会だ』という確信と『社会は変えられる』という希望をよみがえらせ、拡散することです」

(聞き手 論説委員・高橋純子)